「高齢者協同組合」への私の思い

菅野　正純（協同総研主任研究員）

「高齢者協同組合」が構想の段階から、実際に全国で設立する段階に移り始めました。

この９月15日には、三重、沖縄に続いて愛知県高齢者協同組合が設立されました。名誉組合員のきんさん・ぎんさんのテープによるメッセージが、竹下景子さんのメッセージとともに総会に「華」を添えてくれました。

顧問には、本山政雄・元名古屋市長をはじめ、岡田博（前愛知医科大学学長）、飯島宗一（愛知県芸術文化センター総長）、稲子恒夫の４人の名古屋大学名誉教授が並ぶという壮観ぶりです。

理事の構成も、愛知高齢者就労事業団とあいち労働協同事業団の代表だけでなく、医療生協やゆたか福祉会、名古屋リフトタクシー、東海共同印刷の人々や、研究者、弁護士、保健婦、福祉関係者など、願っても簡単には得られない多彩な顔ぶれで、とくに元・名古屋市労連委員長、元・名古屋市交通労組委員長、前名古屋市職労組委員長という、労働組合運動のベテランが参加されたことは画期的です。労働組合と高齢者協同組合があい携えて、働く人々の人生全体をゆたかに創造することができれば、と期待がふくらみます。

三重での生活協同組合法人認可と並んで、愛知高齢者協同組合の発足は、高齢者協同組合運動の質と広がりの面から、新たな飛躍をもたらすことはまちがいありません。

ここでは、私自身の思い入れを含めて、あらためて「高齢者協同組合」は何をめざすものなのかをまとめながら、研究所の会員のみなさんにもぜひそれぞれの地域での高齢者協同組合づくりに関わっていただくことを訴えたいと思います。そして、地域事業団・センター事業所のみなさんには、ぜひ、大きく視野と構えを広げて、まわりの方々に呼びかけてほしいと思います。

佛教大学の集中講義での出会いとヒント

個人的なことで恐縮ですが、当研究所の会員の植田章さんのお誘いを受けて、よせばいいのにこの９月９～10日、佛教大学通信教育部の「社会福祉学演習」の「集中講義」（会場、東洋大学）を担当しました。

「福祉とは、生きがいを実現する機会である」というセンの言葉を手がかりに、この際と開き直って「福祉と協同―人間社会再生の運動としての」と題して、高齢者協同組合を中心に話をさせていただきました。私の教室の受講生は、約30人で、とくに特別養護老人ホームやデイサービス・センターで働いている方が多数おられました。

「福祉と協同」の取り合せに、受講生のみなさんもはじめは戸惑いを感じられたことと思いますが、福祉が「生きがいを実現する機会」とすれば、それはすべての人の問題であり、働ける間はみんなで仕事をおこして新しい役割を獲得しながら、元気なうちから仲間をつくり、生活全体を支え合う高齢者協同組合は、福祉の一つの有力な主体であり、公共はこれを支える関係にある。そして「高齢者が主人公として生きる」ことを支えることの中に福祉労働の新しいあり方が見えてくるのではないか……という、きわめて強引な展開で講義を進めました。

長時間話すネタがないという苦しい舞台裏から、同じく講師を務められた内山哲朗さんのアドバイスを幸いに、学生のみなさんには「グループ討論」をお願いしました。その中で、施設で働いている人たちの悩みが率直に打ち明けられ、私自身、考える大きなヒントを授かりました。

その悩みとは、高齢者が主体にならなければいけないと思いながらも、現状の施設は、サービス

を提供する側とされる側に截然と分れており、あらかじめ決められた日課にしたがって1日を過ごすことになっている。植物に水をやったり、食事の準備を手伝ってもらったりということが施設の中では自然にできない、といったことです。施設で働いている人自身が、高齢期に今のような施設で生活したくないというのですから、なるほどこれでは働く確信や働きがいが充分実感できないのもやむをえません。

現場のそうした苦闘と、私の妙に確信を持った話がどこでどうつながるのか、内心「これは困ったことになったな」と思っていると、一人の人が「〝協同〟だったら、こんなこと――つまり決まりきった日課を押しつけることにはならないのかも知れないね」と言ってくれたので、私もみるみる体勢を取り戻し、次のような「まとめ」(まるで集会ですが) を行ないました。

「そうなんです。施設に入ってくる人に『ここはみなさんのお世話をするところですよ』というのと、『ここはみなさんが主人公となって生活する場です。私たちは、その手助けをします』というのでは、全く違ってきますね。できることは、みんなでやっていこうということが『作業療法』などと言わずとも、自然にやられるようになるでしょう。

同時に、施設で働いているみなさんたちのような人が――ほんとうに人一倍心のやさしそうな人たちです――時には地域に出て、元気な高齢者をつくるコーディネイターになってもらったらどうでしょう。きっと、その経験が施設のあり方にもいい影響をもたらすのではないでしょうか。さらに、今後高齢者協同組合が伸びていけば、そうした新しいコーディネイターが、何千何万という単位で必要になってきます。そうなれば、『家事の延長にすぎない』などという、とてつもなく遅れたヘルパー観を、働く人自身が仕事の質を高める中で打ち破り、日本社会になくてはならない専門職として自らを確立し、正当な社会的評価と報酬体系を獲得することも可能になるのではないでしょうか」と。

講義のことを考えて、夏中重苦しい気持でいたのですが、終わってみると、貴重な出会いと発想のヒントを与えていただいて、植田先生をはじめ、佛教大学の方々、何よりも受講者の方々に感謝の気持でいっぱいです。

高齢者協同組合のめざすもの

こうした出会いから新たに考えさせられたことを含めて、あらためて高齢者協同組合のめざすものについてまとめてみます。

1. 高齢者観の変革／文化と社会の変革

第1に、高齢者協同組合は、高齢者観、ひいては人間観の変革を通して、私たちの文化と社会を変革する取り組みである、という点です。

高齢社会は、言うまでもなく、人類史上初めて多数の人間が長生きするようになった社会ですが、そうした事態は多数の人が高齢期になってもなお元気であるがゆえに成立したはずのものです。だとすれば、最大の問題は、高齢期の人生をどう充実したものに設計し、創造するかであり、新しい質の介護もこれとの関連において正当に検討されることになるのではないでしょうか。

「高齢者問題」は、「高齢者の問題」ではなく、人間らしく自分の人生を生きたいという高齢者の当たり前の願いや要求に対して、これに応えられないでいる私たちの文化や社会の立ち後れと歪みの問題であり、それをどう変革していくかという問題であると思うのです。だとすれば、「高齢者問題」は、子供から若者、大人のすべての人生のステージにある人々の、人間らしく生きたいという願いを実現することと一体のはずです。

ここで、高齢者をどう見るか、人間をどう見るかが、根底から問われることとなります。

関川夏央『よい病院とは何か』(講談社文庫) の次の一節は、「あわれな高齢者」観を解体し、対等な人間としての高齢者に出会わせてくれます。

……老人ホームに芸人が慰問にくる。老人ホームにくるくらいだから率直にいって一流ではない。それでも老人たちは熱心に見聞きする。拍手

する。ときには涙を流して感動する。芸人も感極まって、ともに手をとりあって泣いたりもする。／しかし芸人が帰ったあと、職員が、ほんとにそんなによかったの、と尋ねると、せっかくきてくれたんだからさ、という。でも芸はヘタだったね、と冷静に評価し、なぜヘタなのか分析的説明まで加えたりもする。

「老人は筋金入りのリアリストであり、あわれんでくれる人には、あわれな老人をみごとに演じてくれる」とは、三好春樹氏のコメントです。

ベティ・フリーダン『老いの泉』(山本博子、寺澤恵美子訳、西村書店）も、アメリカのマスコミにおいて、65歳をすぎて、何かしら活気があり、生産活動に従事している高齢男女のイメージが皆無であること。元気な高齢者に代わって、「問題」としての高齢者だけが取り上げられていることの中に、アメリカ社会の高齢者観の歪みを摘出しています。

そして「本当は、もう降りてしまいたい競争もある。しかし、働いたり、愛したり、生きがいや敬意や親密な人間関係をつくりだす別の方法があるのではないか」と呼びかけているのです。

2. 人間らしい仕事をおこす

高齢者協同組合は、第２に、高齢者自身による、人間らしい仕事おこしの運動である、という点です。

北九州・遠賀中間事業団の仲野理事長は、①働ける間は働きたい、②気のおけない友達と毎日顔を合わせていたい、③「粗大ごみ」扱いされたくない、④たたみの上で死にたい、が事業団のみんなの共通した願いであり、しかもこれはみな「行政じゃしきらんこと」だと言っています。

高齢者協同組合づくりの取り組みの中で、いろいろな仕事おこしのヒントが、集まった人々や周囲の人々の中から、さまざまに出されていますが、その遠賀中間では、２万坪の遊休農地を高齢者協同組合の農園としてタダで活用できないかという話が、農協の組合長から提案されています。

遠賀中間事業団では、すでに飼料や肥料の宅配から朝市まで、農協との提携を進めてきましたが、こんどの提携は、「百姓のことを誰も考えてくれない」(農協組合長）状況に対して、住民自身の力で高齢者の仕事おこしと農業の再生を結びつける、底深い取り組みになりそうです。

同じように「仕事をおこす高齢者」の姿が、『日本人の老後』(晶文社）の中には、たくさん記されています。ちなみに、同書は、研究者や行政当局にありがちな、上から、外側からの高齢者のとらえ方ではなく、女性インタビュアー集団「グループなごん」が日本の高齢者百人に直接取材してまとめた好著です。

ここでの高齢者たちの仕事おこしに共通しているのは、自然、本物、人の役に立ち、人と人とのつながりを実感できることが基準になっていることです。これは、すべての人々が内心で願っていることではないでしょうか。

「企業社会」は、金もうけ第一主義の下に、働く人々を「会社人間」に仕立てて、出世競争どころか生き残り競争に駆り立ててきました。その上、定年によって、あるいは「リストラ」によって、突然仕事と役割を奪い、家庭内では「濡れ落ち葉族」「恐怖のワシ男」さらには「定年離婚」の悲劇をもたらしてきました。高齢者問題は、企業社会によっていっそう増幅されてきたと言えますが、高齢者の仕事おこしは、新しい働き方と生き方を提示するものとして広がり、企業社会の歪みを日本社会の深いところから正す力となるように思います。

3. 仲間づくり・生活づくり

第３に、高齢者協同組合は、無数の「たまり場」を拠点に、地域の高齢者が集い、〝本物〟の産直や一人暮らし二人暮らしの高齢者世帯のための食品の「小分け」、みんなで料理をつくり食事を楽しむことや、「気功」も含めた健康づくりなど、仲間づくりと生活づくりを進めようというものです。

前掲ベティ・フリーダンは、男性が妻に先立たれると２年内に死ぬ確率が高いのに対して、「女

性はなぜ長生きするのか」という、男にとってはいささか気になる問いを立てて、それは女性が家族以外の親密な人との結びつきを再びつくりだす能力にすぐれているからだとしています。さらに「がん、心臓病、障害、その他さまざまな病気から回復する割合と回復の程度は、友人や親戚や所属団体仲間からの気楽な『支え』によって増大する」と仲間づくりの意義を強調しています。

幼い頃からの生き残り競争で現代人の心はドライになりきり「助け合いなんてかったるいワ」と思われてきましたが、高齢社会は、この面からも、人と人との結びつきの再生をもう一度呼び起こすものとなりそうです。

4. 福祉のあり方をつくりかえる

第4に、高齢者協同組合は、福祉のあり方を創造する運動でもあるという点です。

「公的介護保険」構想が「不安なき老後の福祉革命」といった誇大とも言える宣伝を伴って進められていますが、福祉改革の根本が見えているとは到底思えません。

愛知県保険医協会の國見辰雄先生は十数年前から訪問医療に取り組まれていますが、つい最近もこんな事例を経験されています。

・・・・祖父と孫娘（小学校教員）の二人暮らしで「ヘルパー派遣を福祉課に頼んだが、独り暮らしの老人だけで手一杯と断られ」「粘った結果、寝たきりの状態が3ヵ月以上続いた後、ようやく週2回、1回2時間のヘルパーが来てくれるようになった」。ヘルパー派遣には、「3ヵ月の完全な寝たきりの見習い期間」が必要なのか、と。（月刊保団連）

高齢者協同組合は、こうした事態をつくりかえ、時代が求める福祉像を創造することを重要な課題とせざるをえないと思います。

新しい福祉像の柱には、①高齢者が主人公となり、仲間づくり、生活づくり、仕事おこしに取り組むことによって、「元気をつくる」積極的で総合的な福祉を追求するとともに、②高齢者と家族、サポーターが参加し、「住民が主人公」となって公共がこれを支援する福祉像への転換を進め、③高齢者や家族の信頼できる仲間としての「コーディネイター」の協力を得て、介護の研修・設計から、公的サービスへのアクセス、住宅改修や福祉機器の活用に至るまで「寝たきりにしない介護」を実現することなどが想定されます。高齢者協同組合と労働者協同組合の連携が、その土台となることはまちがいありません。

5. 新しい協同組合運動として

最後に、高齢者協同組合は、新しい協同組合運動であるという点です。

欧米の「障害者協同組合」や「社会的協同組合」において、①社会的ハンディを負わされた人々と職員、ボランティアの人々が対等な組合員として、②仕事も生活の支え合いも総合的に行なう協同組合、というあり方が有効性を発揮しています。ここから学びながら日本の中で優れた実践を積み重ねてきた共同作業所運動などと、日本版「社会的協同組合」を展望しつつ、「生活全体のサポート事業」を通じて、労働者協同組合の必要性を具体的な姿で日本社会に訴えることが可能になるものと確信しています。

多くの人々の協力と参加を訴える所以です。